

環境と人間 I

森の文明・自然の叡智

日時：平成19年10月13日（土） 13:00～15:00

講師：稲垣 隆司（愛知県副知事）

概況



【森林について】

日本は森林率が6割を超える森林国ですが、国民一人当たりの森林面積に換算すると世界平均より少ない、そんな話から講義が始まりました。世界的に見ると森林は熱帯域、冷温帯、亜寒帯、大陸の東岸部に分布しており、降水量分布と植生分布を比較すると、年降水量が多い地域に森林が成立していることが分かります。しかし、降水量の少ないシベリアやカナダ北部にも常緑針葉樹林が広がっています。このような森林は、夏季に得られる永久凍土の融水が、少ない降水量を補っています。森林が成立するための重要な要素は温度と水分、中でも降水量と蒸発散量の関係と言えます。

【森林と人間のかかわり】

縄文時代、東日本や東北地方を中心に、山菜やブナの実、鳥獣や水産物を食べるブナ帯文化が成立しました。弥生時代には稲作が伝来し、水稻栽培を中心とした照葉樹林文化が西日本を中心に成立しました。弥生時代後期から近世に至るまでは、スギ・ヒノキに代表される木の文化でした。また、6～7世紀になると照葉樹林を肥料や燃料として利用しつづけた結果、マツ林が侵入し、そして燃料や肥料として利用されるようになりました。そして現代では、エネルギー革命により里山を利用しなくなり、植生遷移が進行しています。このように、人間の影響(利用)により森林は変化してきました。

【森林のはたらき】

森林は(1)木材生産機能、(2)水源涵養機能(洪水調節、渇水緩和、水質浄化)、(3)国土保全機能(自然災害の防止・軽減)、(4)環境養護機能(気象緩和、大気浄化、野生鳥獣保護)、(5)保健休養機能があります。

【生態遷移について】

植物群落が微気候や土壌条件などの変化を起こし、それに応じてより安定した群落へと発展することを生態遷移といいます。遷移の過程では植物相が変化しますが、それに伴って動物相も変化します。遷移には、乾燥したところから始まる乾性遷移と、湖沼などの陸地化から始まる湿性遷移があります。

【自然環境を保全するには】

わが国における自然環境保全の流れ、生物多様性確保の必要性を説明した後、愛知県における自然環境保全施策の現状とこれからについて説明がありました。これからの主要な施策として、生態系ネットワークの形成・維持、希少野生動植物の保護、自発的な取組の促進、調査研究の充実を挙げていました。また、森林環境税についての説明もありました。